2025 第 22 回 JSCA クィーンズランドスイミングチャンピオンシップ遠征報告書

報告：団長　松川　大悟

遠征日程：２０２５年１２月１１日（木）～２１日（日）　１０泊１１日

引率役員・コーチ　７名

団　　長	松川　大悟	男	わかあゆ SC
副　団　長	安井　俊治	男	姫路市立総合スポーツ会館 SS
ヘッドコーチ	田村　篤識	男	金沢 SC 中林
サブヘッドコーチ	野崎　実央	女	コパン可児
ドクター	平野　真理	女	ふくおか公衆衛生推進機構
シャペロン	聡子　フレンド	女	オーストラリア在住
コーディネーター	清水石　寛	男	K・コンシェルジュ

選手団　９名

東京　副キャプテン	池畑　絢翔	男	14 才・中 2	藤村 SS
静岡	重田　柊真	男	12 才・小 6	BIG 棒屋
石川	中池　柊仁	男	12 才・中 1	金沢 SC 中林
東京	宇野　絢斗	男	12 才・小 6	新代田 SS
三重　キャプテン	奥田　真由	女	16 才・高 1	津アサヒ SS
東京	榊原　光莉	女	12 才・小 6	藤村 SS
岐阜	川合　美遥	女	12 才・中 1	コパン可児
香川	樋川　采葉	女	12 才・小 6	JSS センコー
兵庫	南口　百花	女	12 才・中 1	コナミ西宮

１２月１１日
全国各地から成田空港第２ターミナルに選手９名、スタッフ６名、丁子事務局長が夕刻に集まり結団式を行う。団長挨拶、各選手・スタッフ自己紹介、清水石コーディネーターから遠征の諸注意。第３ターミナルへ移動し軽食を摂り、いざ！と思いきや、何故だか警察官から足止めされるが、頑張ってください！と激励をいただく。事務局長、保護者のお見送り後、バスで沖留めの航空機へ向かい、ほぼ定刻通りに出発。狭い機内ながらも、映画や音楽で各々リラックス。夕食後は眠りにつく。

１２月１２日
無事にブリスベン国際空港に到着。昨年のようにコーチ陣が別室に連行されることもなく、無事入国。現地は小雨で少し蒸し暑い。今回お世話になるバスのドライバー『ベンさん』の運転で、ローンパイン・コアラ・サンクチュアリへ。男子選手１名が体調不良を訴えるも平野ドクター対応のもと、完全復活。どうやら機内でほとんど眠れなかったことが原因の様子。ここで期間中お世話になる聡子シャペロンと合流。日本ではなかなか見かけない動物に心が癒される。昼食はブリスベン市内を一望できるマウントクーサ展望台レストラン。ボリュームのあるハンバーガーに皆大満足。ホテルにチェックインし会場へ向かう。到着後、ブリスベンアクアティックセンターを本拠地とするチャンドラーＳＣの木村ヘッドコーチにご挨拶。激励とアドバイスをいただき、田村ヘッド、野崎サブヘッドのもとアップを行う。慣れないレーン左側通行や独特の水のしょっぱさに戸惑うも、入念に感覚を掴んでいた。夕食はイタリアン。昼食に続くボリュームに圧倒されながらも完食。明日に備えミーティングを行い、眠りにつく。

１２月１３日　大会初日
天候は快晴。チームの結束は高まってきている。昨日までの疲労も抜け、朝食をしっかり摂っていた。本日はリレーのみ。男子メドレーリレー最中に火災報知器が鳴るアクシデント、会場が一瞬ざわめくも、どうやら現地の子供が報知器のボタンを押してしまったとのことで、火事ではなく一安心。男女とも全種目メダル獲得。また初日から積極的に現地の子達と交流を図る選手もいるなど、海外での試合に臆することのない様子。夕食はボリュームのあるステーキ、ほぼ全員完食。ホテルへ戻りミーティングを行い、明日からの個人レースに向けて団長から、レース後は握手やハグ、グッジョブといった互いの健闘を称えあう文化をレクチャー。慣れない洗濯や身の回りのことも済ませ就寝。

１２月１４日　大会２日目

天候は曇り時々晴れ。寝ぐせが目立ち始め、朝食時間ギリギリに集まる選手が数名。食欲は旺盛、元気はある。今日からレース開始時間にあわせて２便に分かれて出発。マーシャリングルーム（召集所）では、池畑副キャプテンをはじめ多くの日本選手達が地元選手から声をかけられたり、注目を浴びていたようだ。予選を終え、いったんホテルへ戻り体を休ませ、夜の決勝レースに備える。決勝になるとスタッフも一段と緊張感が走る。マーシャリングには聡子シャペロン、サブプールやコーチングボックスには田村・野崎両コーチ、表彰式を含む写真撮影を安井副団長、スタンドでの応援隊やレース動画撮影、その他全般を松川団長、平野ドクター、清水石コーディネーターで対応。初日からサイクルはうまく回っている。ちなみに午後出発便で１名寝坊。本人大反省。それを挽回する気合の入った大応援もあり、決勝でも全員大活躍。

１２月１５日　大会３日目

天候は晴れ。気温３４度。朝晩は涼しいが昼間は刺すような暑さ。サングラス、帽子は必須。食欲は旺盛。女子１２才２００m個人メドレー予選では、日本チームが１位から４位まで独占。男子１２才１００mバタフライでも１位から３位まで独占。日本チームはビジター枠で、決勝進出２名までという規定があるため、日本選手同士の争いとなった。決勝では予選からタイムを上げてメダルラッシュ。奥田真由キャプテンは女子１６才４００Ｍ自由形で、セントピーターズＳＣのデニス・グレイブ選手と激しいデッドヒートを繰り広げ勝利。レース後、固いハグで健闘を分かち合った姿に、見ていた我々も胸を打たれた。すぐに親友となった二人は以降、数種目で戦い、友情を深めた。大会期間中のお昼のお弁当や夕食は『祭りキッチン』さんにお願いしている。選手もスタッフもやはり日本食が胃に沁みるようだ。夕食後のミーティングでは、田村ヘッドからこの遠征のテーマを全員で再確認し、この折り返し地点から再度気持ちを一つにといった話があった。本日時点で自己ベスト更新１７種目。

１２月１６日　大会４日目

天候は曇り。相変わらず食欲は旺盛。本日レースの無い選手が多かったため、午前中はホテルでオフ。とはいえ、コンディション維持のため４０分ほどの散歩に出かける。少し汗が滲み出るくらいのちょうどよいアクティブレストとなった。今年も聡子シャペロンから手作りスイーツやマンゴーの差し入れをいただき、あっという間に完食。本日も決勝では自己ベスト連発、21 時過ぎに始まった最終レース、奥田キャプテンの１５００ｍ自由形を最後まで応援し続ける日本チームの姿は、会場内でも一際目立っていた。ちなみにレース前、安井副団長と奥田キャプテンがペースサインの打ち合わせをしていたのだが、副団長がコーチングボックスから 16 分間サインを送り続けるも、体の大きなオージーのコーチ陣に埋もれ、キャプテンからは副団長の姿がほとんど見えていなかったとのこと。副団長はショックを受けるも、笑い話に。それでも見事にペースを刻み、結果を残したキャプテンは流石であった。

１２月１７日　大会５日目

天候は曇り。男子２名寝坊。疲れが見え始める中でも、日本チームの勢いは誰にも止められない。女子１２才５０ｍ背泳ぎ予選で榊原光莉選手（藤村ＳＳ）が３０秒２１のクイーンズランドオールカマーズレコードを樹立、決勝では樋川采葉選手（ＪＳＳセンコー）が更に上回り、日本学童記録まで０．３４秒に迫る２９秒５１を樹立、会場を沸かせた。この日、今大会の参加にあたり便宜を図っていただいたクイーンズランド水泳連盟事務局へご挨拶。本日も日本チームは大活躍だった一方、目標タイムに届かなかったり、悔しい想いをした選手もいる中、ミーティングではコーチ陣から後半戦での心の持ち方をアドバイス。スタッフ、選手、残り２日間の結束をより深めた。今日の時点でなんと全員が金メダルを獲得、素晴らしい。

１２月１８日　大会６日目

天候は快晴。日差しが突き刺さる。疲労はピークに。長期遠征になると自己調整が重要になる。泳ぎの感覚が良くない場合、どう修正すべきか、体力的にきつい場合、回復のためにどう行動すべきなのか、もちろんコーチのアドバイスはあるが、自分の未来を決めるのは自分自身。今回は小学６年生、中学１年生がメインのチームで、初の海外長期遠征で大変だと思うが、自分の身体と対話し修正する意識も高めていけると、更に良い結果が待っていると思う。答えは自分自身の中にある。そういった中でも、経験豊富な安井副団長の本質を捉えた助言、田村ヘッド・野崎サブヘッドの同級生コンビによる鋭い洞察力と人心掌握術、平野ドクターの安心感、この遠征に無くてはならない存在の聡子シャペロン、清水石コーディネーターの献身的なサポートによって、本日も多くのメダル獲得や自己ベスト更新に導く。

１２月１９日　大会最終日

天候は雲一つない最高の快晴。今日は大半の選手がスロースケジュールということで、午前２便目の出発を遅めた。昨日の時点で自己ベスト３５種目、金メダル３２個の大活躍。大会最終日ということでクリスマスムード全開、競技役員や地元コーチ達もサンタの帽子を被り、場内 BGM のクリスマスソングに合わせてリズムを取っている、このおおらかな雰囲気は日本では見られない。折り返し監察員は普通に踊りながら監察している。クイーンズランドチャンピオンシップ最終日は伝統的にこういったお祭りのような雰囲気。日本チームも郷に入れば郷に従えということで、松川団長指揮のもとＪＳＣＡ九州式パフォーマンスを導入し大会最終日を共に盛り上げた。また今回お世話になったもう一人のドライバー『デイビッドさん』は、空き時間にわざわざ自費で観戦し、最終日には日本式の応援を一緒にやってくれた。昨年までのドライバー石坂さんは都合により今回は不在、オージーのドライバーさんがフレキシブルに対応してもらえるか不安はあったが、今回とてもよくサポートしていただけた。日本チームは最終レースまで皆で大応援。金メダル３６個、銀メダル１７個、銅メダル６個、６３種目中４１種目自己ベスト更新、参加者全員金メダル獲得はＱＬＤ遠征史上初の快挙、有終の美を飾った。大会を無事に終えリラックスムードの夕食では、聡子シャペロンの手作りケーキに選手たちは大興奮、あっという間にたいらげた。

１２月２０日

快晴。最高の天気。ゴールドコーストへ移動しサウスポートビーチにて海水浴。ボディサーフィンや砂遊びなど目一杯楽しむ。2～3feet のパワフルな波がブレイクする中、団長率いる選手達は普通に波を乗り越えている。沖に出るとそこで監視中のライフセーバーから『すごい泳力

だね！』と声をかけられる。疲れているはずなのに、遊びになると更にパワーを発揮する選手達。遊んだ後はビーチを眺める最高のテラス席で昼食、パラダイスこの上ない。この時点で田村ヘッドの『うまっ！』も１００回は耳にした。午後からはアクアパークに移動し、さまざまなウォーターアトラクションを楽しんだ。サーファーズパラダイスのホテルに移動。夕食時には成績発表会を行い、獲得したメダルを首から下げ、今回の感想を各自一言。全員が自然と口にしたキーワードが『感謝』。この気持ちを常に持ち頑張る選手が、誰からも愛され応援してもらえる選手になれるはず。オールカマーズレコードを樹立した樋川選手、榊原選手には松川団長から新記録証を授与。そして日本チーム女子優秀選手賞は奥田選手、男子優秀選手賞は池畑選手、最優秀選手賞は樋川選手が受賞。3 名には聡子シャペロンの計らいでクイーンズランド水泳連盟からいただいた、２０３２ブリスベンオリンピックのオフィシャルピンバッチ（非売品）を贈呈。最後に選手達からのサプライズで、期間中お世話になった聡子シャペロンへ感謝の気持ちで獲得した５９個のメダルを首へ。聡子シャペロンも目に涙を浮かべていた。

１２月２１日

サーファーズパラダイスからブリスベン国際空港へ。ここでドライバーのベンさん、聡子シャペロンと名残惜しいお別れ。この１０日間の思い出が一気に蘇る。定刻に出発、成田空港に到着後、丁子事務局長、保護者がお出迎え。解団式を終え、関東組は帰宅、その他は後泊。ＪＯ等での再会を誓う。

2025 Queensland Championships　チーム結果

メダル獲得数

	個人	リレー	合計
金	33	3	36
銀	17	0	17
銅	5	1	6
合計	55	4	59

ベスト率（ベストタイ含）41/63 種目（65.1%）

総括

今回の遠征では結団式をはじめ、夜のミーティングでもチームの指針を大切にしました。スタッフ陣は選手達の表情や行動を注意深く観察しつつも、指示は一から十まで出さずポイントを伝え､自分で考えさせようとする姿勢が､彼等の成長の一助になったのではないかと思います。選手達においても、日が経つにつれチームの一員として自ら考え行動し、互いに協力する姿に成長が垣間見えました。また競技成績はもちろんのこと、積極的に地元選手と交流を図り、異国の地で様々な経験を通じて見聞を広め、今後の競技生活の糧になったのは間違いないと確信しています。今回特に大切にしたテーマ『感謝～３つの表現～』。選手達も１０月のＪＳＣＡで優秀な成績を収めたからこそ選抜されたのは間違いありません、しかしそれは本人の努力はもちろん、各家庭・所属クラブ・コーチの日頃の支えがあったからこそ。そういった周囲の方々や、本遠征のコーチ陣、ドクター、シャペロン、コーディネーター、ドライバー、シェフ、多くのサポーターへ『感謝』を体現できた姿に、我々スタッフも嬉しく思いました。これからも支えてくださる方々へその気持ちを忘れず、誰からも愛され応援してもらえる選手になってほしいと心から願っております。結びにこの遠征にあたり、ご協賛・ご提供頂きました江崎グリコ(株)様、ミズノ(株)様、(株)サンワ様、(株)ヒカリスポーツ様に感謝とお礼を申し上げます。